

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(S)

研究期間：2010～2014

課題番号：22223005

研究課題名(和文) 現代日本における若年層のライフコース変容と格差の連鎖・蓄積に関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study of Changes in the Life Course and Cumulative Advantages and Disadvantages among the Youth in Contemporary Japan

研究代表者

石田 浩 (ISHIDA, HIROSHI)

東京大学・社会科学研究所・教授

研究者番号：40272504

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 153,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、若年者を対象にしたパネル(追跡)調査を長期にわたり継続することにより、社会的背景、教育達成、初期の職業キャリア、結婚・出産などの家族形成、意識や価値観といった多面的な角度から「ライフコース」の流れを包括的・総合的に捉え、社会・経済的な格差がどのように生成されていくのかを分析した。その変容過程の解明にあたっては、「格差の連鎖・蓄積」という理論枠組を用い、ライフコース研究と格差研究の橋渡しという学術的貢献を目指した。

研究成果の概要(英文)：This study conducted a panel survey of Japanese young people for an extended period of time. It focused on the following diverse aspects of the young people's lives: social background, educational attainment, early career trajectory, family formation, and attitudes and values. By adopting the theoretical framework of "accumulation of advantages and disadvantages," the study examines the process through which social inequality is produced and reproduced across the life course and contributes to bridging the life course research and the study of social stratification.

研究分野：社会学

キーワード：格差 不平等 階層 階級 社会移動

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 1990年代以降、非典型雇用、低賃金、長時間労働など若年の就業をめぐる問題や、離家の遅れと晩婚化・未婚化といった若年者の婚姻行動の変化が社会的に注目を浴びてきた。このような就業、結婚などにかかわる社会の変動は、若年者自身の意識や価値観の変容と関連していると考えられる。

(2) 若年者の就業問題を明らかにするには、若年者を追跡し、学校から労働市場への移行の経験と初期キャリアにおける就業行動を跡付けることが必要となる。同様に、親元を離れる時期の遅れと婚姻行動との因果関係は、成人子と親世帯との関係の変化を追うパネル調査によってしか正確に把握することはできない。若年者を取り巻く社会・経済的な環境が大きく変貌するなかで、若年者が壮年期に差し掛かるライフコースの流れを総合的に跡付ける重要性が指摘されるようになった。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、若年者を対象にしたパネル(追跡)調査を継続することにより、教育・就業・家族・健康・意識といった多面的な側面を「ライフコース」の変容として包括的・総合的に捉えるとともに、若年者の格差がどのように生成、蓄積されていくのかを検証することである。その変容過程の解明にあたっては、「格差の連鎖・蓄積」という理論枠組を用い、ライフコースを通じた格差生成のメカニズムとして分析していく。本研究は、ライフコース研究や格差研究のフロンティアを切り拓くという学術的貢献に加え、若年雇用政策や晩婚化・少子化に関する施策を提言することを目指す。

(2) 生れ落ちた家庭環境によるスタートラインでの機会の平等・不平等が、その後のライフコースにどのような影響を与え、将来にわたって持続して格差を維持・拡大させるのか、それとも教育達成やキャリア形成の過程で初期の不利を跳ね返すことが可能なのか。以上のようなライフコースと格差の関連は、長期にわたるパネル調査の分析によって検証可能となる。若年・壮年を比較的長期にわたって継続して追跡し、ライフコースを多面的、包括的にとらえるこのような調査は、日本では他に類を見ない独創的なプロジェクトである。

(3) 本研究は以下のような5つの特色がある。(a)継続性 若年個人を2007年から10年間ほどの長期にわたり継続して追跡することにより、若年から壮年にかけての様々なライフイベント(転職・結婚・出産など)が生じる時期の変化を捉えることが可能となっている。

(b)総合性 「格差の連鎖・蓄積」という枠

組から、若年者の働き方、健康、家族形成、価値観や考え方など多様な側面がどのように関連し変容していくのかをライフコースを通じた格差の形成として、総合的にとらえることを目指す。

(c)学際性 教育(教育社会学)、就業(労働経済学、人事管理)、家族(人口学、家族社会学)、健康(医療・健康社会学)、意識(政治・社会意識論)といった異なる分野の研究者が協力する学際的研究である。

(d)比較可能性 調査の企画段階から国内の主要な全国調査、海外(アメリカ・イギリス)のパネル調査の設計を参照し、比較可能な質問項目を挿入している。

(e)公開性 研究代表者の所属機関に設置されている社会調査・データアーカイブ研究センターと密接な関係をもち、クリーニング・コーディング作業の後に調査データを寄託・公開している。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究プロジェクトは、パネル調査の継続に関わる「調査の企画・実施」と、その調査を分析する「調査データの分析・研究」という2つの軸から成り立っている。「調査の企画・実施」については、調査企画委員会と調査実施委員会の2つの委員会が企画・実施・クリーニング・コーディング作業を分担して行った。「調査データの分析・研究」では、4つのテーマ別に研究班を組織し、研究班ごとの活動を基礎に4班全体での会合を開催し、国内外の学会で共同報告を行った。

(2) 本研究では、2004年3月に卒業した高卒者を追跡する高卒パネル調査と2007年から若年・壮年期にある対象者を毎年追跡する「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」(若年パネル調査・壮年パネル調査)を実施してきた。

高卒パネル調査は、2003年度に全国4県の全日制高校から無作為に抽出した学校の3年生を対象として実施し、101校に在籍する7563名の生徒から調査票を回収した(回収率69%)。卒業後も調査への協力に同意し、住所を記入した2000名あまりの高卒者その後(2007年を除き)毎年追跡している。郵送で調査票を配布し、郵送あるいはWebにより回収する方法を採用している。2004年と2006年には高卒者の保護者に対する調査も実施した。詳しい回収状況については省略するが、毎年500名ほどの卒業生から調査票を回収しており(アタック数に対する回収率は年度により異なるが25-33%)、第12歳までの調査を実施している。

(3) 若年・壮年パネル調査は、全国の若年者(2007年に20-34歳)と壮年者(35-40歳)を選挙人名簿と住民基本台帳から抽出し、対象者を2007年から毎年追跡するパネル調査である。調査票を郵送し、調査員が訪問して

回収する方法を採用している。第1波から第9波までの回収数と回収率を下記に示した。

表1 若年・壮年パネル調査の回収状況

時期	若年調査			壮年調査		
	回収数	(1)	(2)	回収数	(1)	(2)
第1波 2007年1-4月	3367	35%	-	1433	40%	-
第2波 2008年1-3月	2719	81%	81%	1246	87%	87%
第3波 2009年1-3月	2443	79%	73%	1164	86%	81%
第4波 2010年1-3月	2174	73%	65%	1012	79%	71%
第5波 2011年1-3月	2232	76%	66%	1087	85%	76%
第6波 2012年1-3月	2121	79%	63%	1058	88%	74%
第7波 2013年1-3月	2039	79%	61%	1038	89%	72%
第8波 2014年1-3月	1989	81%	59%	1002	88%	70%
第9波 2015年1-3月	1931	81%	57%	974	88%	68%
(1) 有効アタック数に対する回収数の比率						
(2) 第1波回収数に対する回収数の比率						

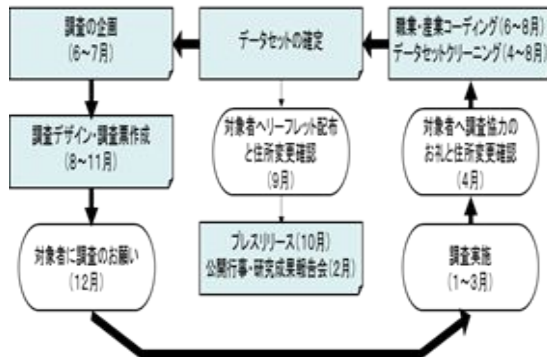
パネル調査は、調査を継続するなかで回答者が脱落していく傾向がある。回答者の数が毎年減少していくことを考慮し、2011年にはパネル調査回答者の補充サンプルを追加した。2007年当時に20-34歳(若年調査)と35-40歳(壮年調査)であった人を母集団とし、第1波とまったく同じ手続きで対象者を抽出し、郵送配布・郵送回収の方法で補充サンプルとして調査を実施している。

表2 若年・壮年パネル調査の補充サンプル

時期	若年調査			壮年調査		
	回収数	(1)	(2)	回収数	(1)	(2)
第1波 2011年1-3月	712	32%	-	251	31%	-
第2波 2012年1-3月	542	76%	76%	202	80%	80%
第3波 2013年1-3月	517	73%	73%	200	80%	80%
第4波 2014年1-3月	493	70%	69%	195	78%	77%
第5波 2015年1-3月	459	66%	65%	188	75%	75%
回収率(1) 有効アタック数に対する回収数の比率						
回収率(2) 第1波回収数に対する回収数の比率						

(4) 図1は、若年・壮年パネル調査の企画・実施・分析に関する1年間のスケジュールを示したものである。四角のボックスは研究者の作業を表し、楕円のボックスは調査対象者へのコンタクトを表す。太い矢印は調査の企画・実施の流れを示し、細い矢印は研究班で行われる分析と成果発表の流れを示す。

図1 若年・壮年パネル調査の調査サイクル



毎年度、調査の準備を6月ころから開始し、調査デザインと調査票設計を12月までに行う。就業や職場の情報、婚姻や家族形成の情報などの基礎的な調査項目については、毎年度同じ形式で質問しているが、意識項目によ

っては、偶数年あるいは奇数年に質問する項目、単年度のみ項目がある。

調査は毎年1月から3月にかけて実施し、4月の異動時期には対象者にお礼状の発送と住所確認を行っている。4月以降にデータクリーニングと職業・産業の自由記述をコード化する作業を行い、8月頃データセットをメンバーに配布し、本格的分析を開始する。9月ころには、4頁カラー刷りの調査速報を対象者に配布し、住所確認を行っている。その後プレスリリースと成果報告会を毎年開催してきた。調査データは、順次データアーカイブで公開しており、現在のところ第6波調査までを公開している。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究では、学校から職場への移行、就業行動とキャリア形成、離家と結婚・出産の家族形成、意識と価値観、という4つの研究班に分かれ、ライフコースの多様な局面で格差・不平等がどのように生成され、継続していくのかを分析してきた。特に労働市場にはじめて参入する初職就職、家族形成をはじめめる結婚など節目のライフイベントに着目し、格差が生成される過程に光を当ててきた。

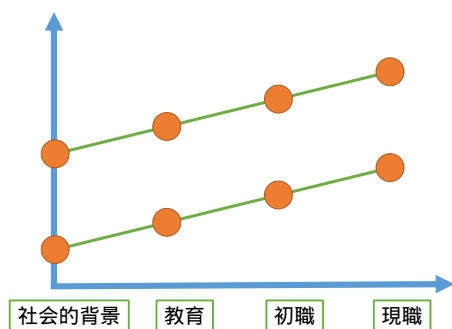
(2) 本研究の成果を「格差の連鎖・蓄積」という大きな理論的枠組みからまず整理する。「格差の連鎖・蓄積」の概念は、ライフコースのある時点の有利さ・不利さがその後の時点の有利さ・不利さに影響を与えることと定義した。それではその後の時点での有利さ・不利さにどのような影響を与えることが考えられるのだろうか。影響の仕方は以下の3つのパターンをとることが考えられる。

第1は、「格差が連鎖・継続」するパターンである。このパターンは、出発点での格差が、その後の時点でもまったく変わることなく継続していく状態を指す。図2は、格差の連鎖・継続のパターンを簡略な図として表現した。ここではライフコースの4つの時点・ステージを考えてみる。X軸はこの4つの時点・ステージをあらわす。出発点は「社会的背景」で、生れ落ちた家庭により決まる有利さ・不利さに対応している。「教育」の時点は、教育達成が修了したステージでの有利さ・不利さである。「初職」は労働市場に参入した時点・ステージでの格差の状態、そして「現職」は調査時点での労働市場の位置による格差の状態をあらわす。

それぞれの時点・ステージについて、有利なグループと不利なグループの2つが存在すると仮定する。Y軸は生活機会の有利さと不利さをあらわす軸とする。上の点は有利なグループ、下の点は不利なグループの位置(グループ平均)であり、その差は2つのグループ間の生活機会に関する格差といえる。第1のパターンの特色は、2つのグループ間の生活機会の格差(Y軸の差)は、どのライフ

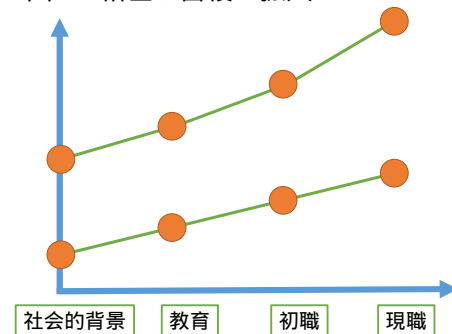
ステージをとっても一定であり、出発点での格差がその後も変わりなく維持されていることである。格差が一定ということは、有利なグループがより有利に、不利なグループがより不利になるのではなく、初期の有利・不利の状態が維持されたまま格差が継続するパターンである。

図2 格差の連鎖・継続



第2のパターンは、「格差が蓄積・拡大」する形である。図3がこれに当たる。X軸とY軸は前の図と同様である。このパターンの特色は、2つのグループ間の生活機会に関する格差（Y軸の差）が、4つのライフコースのステージを通過していくうちに拡大していく点である。出発点（社会的背景の時点）での格差が、教育修了の時点（ステージ）では広がり、初職・現職の時点ではさらに拡大していくことがわかる。もともと有利であったグループが、その有利さを拡大していく傾向である。

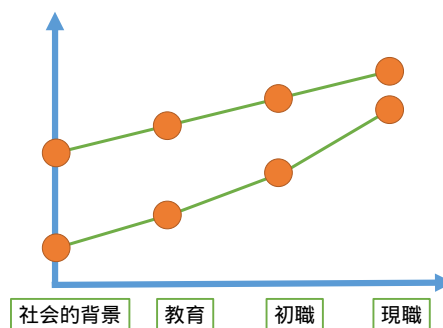
図3 格差の蓄積・拡大



第3のパターンは、「格差が縮小・挽回」する形であり、図4として示した。このパターンの特色は、2つのグループ間の生活機会に関する格差（Y軸の差）が、4つのライフコースのステージを通過していくうちに縮小していく点である。もともと出発点であった比較的大きな格差が、教育達成、職業達成というステージを経験していくなかで、2つのグループの格差が縮まり違いがほとんどなくなっていく。このことは、不利な立場にあったグループが、自らの社会・経済的な達成により、不利を挽回して有利なグループと同じ程度の生活機会の獲得していく過程が

あることがわかる。

図4 格差の挽回・縮小



それではこの3つのパターンのどれが実証的な調査データの分析から支持されたのだろうか。詳細は省くが、社会的背景、教育、初職、現職という4つのライフコースの流れからみると、第1の「格差の連鎖・継続」のパターンが見られることが分析から明らかになった。

(3) 「学校から職場への移行」研究班の分析からは、格差の連鎖・蓄積に関連した知見として、日本社会に特徴的な「学校による就職支援」という制度が、不利な地位の連鎖の流れを断ち切る役割を果たしている可能性のあることが示された。分析結果によれば、学校経由の就職は、父親の職業などの出身階層に関わらず、誰もが利用可能である。そして高校を通じた就職は、学校経由以外の就職と比較した場合に、比較的良好な就職先を提供している。このことは高校を卒業してすぐに就職するという社会の中では相対的に不利な立場にある若年者に対して、学校が就職サポートを通して、不利な立場が継続するという連鎖を断ち切る働きをしていると考えられる。ただし高校を中退する最も恵まれない層については、学校の支援は行き届いていないといえない。

(4) 「就業行動とキャリア形成」研究班の重要なテーマの1つは、個人の各時点での貧困状態を追跡できるというパネル調査の利点を生かした若年者の貧困の再生産・連鎖の研究である。男性では前年度貧困状態にある者の3分の2が翌年度も同じ状態にあり、女性ではその割合は7割以上である。これに対して前年度貧困でない者が、翌年度貧困状態に移行するのは、男性で5%、女性で7%に過ぎない。若年者の貧困は明らかに連鎖の流れがあり、一度貧困状態に陥るとそこから抜け出すことは容易ではないことがわかる。男女ともに、低学歴であること、学卒から初職へ入職する際に中断があること、初職が非正規雇用であることが、貧困状態に移行する確率を高めている。さらに一度貧困状態に陥ると、結婚機会や結婚後の世帯所得などその後のライフチャンスにも影響を及ぼすことがわ

かった。

(5) 「離家と結婚・家族形成」研究班では、若年者が結婚に至る過程において格差がどのように生成されていくのかを検討した。結婚への道のりとして、交際という中間段階を想定することで、出会いから交際への移行と交際から結婚への移行という2つのプロセスを区別した。交際相手を見つけるか否かという最初のステップでは、学歴や初職といった個人の地位はそれほど明確な影響を与えていないが、第2のステップである交際から結婚への移行では、特に男性で結婚意欲が高い場合には高学歴と正規職は結婚への移行を促進し、交際解消を抑制している。社会的な地位によって男性の結婚機会に明らかな格差があることがわかった。

(6) 「意識と価値観」研究班では、意識を媒介とした格差の連鎖・蓄積について分析を行っている。その一例として、個人の持つ将来への「希望」と格差の関連を検討した。個人が自分の将来に希望を持っているか否かについての分析では、本人の教育水準や婚姻状態が影響するだけではなく、それらを統制しても15歳当時の家庭における本の冊数のような、出身家庭の影響が少なからず存在した。つまり、比較的恵まれない家庭に生まれた人の方が、将来への希望を持ちにくい傾向が示されている。さらにパネル分析を行ったところ、将来に希望を持たない人は希望を持つ人に比べて、非正規職から正規職になる確率や、交際相手を獲得する割合が低いことも明らかになっている。このように将来への希望を持てるかについて一定の格差があり、さらにその希望の有無が格差を助長する方向に影響する。これらの分析から、意識を媒介とした格差の連鎖・蓄積という現象の一端が解明されつつあると言える。

(7) 日本の若者に関するパネル調査データとそれに基づく分析結果を「東アジア比較」の方向で発展させる試みとして、2013年1月には、本パネル調査、韓国教育雇用パネル調査(KEEP)、台湾教育パネル調査(TEPS)の各プロジェクトチームメンバーが参加する国際ワークショップを東京で開催し、お互いのパネル調査のノウハウを共有した。さらに台湾の研究チームとは、2012年2月、2014年11月、2015年5月の3回にわたり共同でワークショップを開催し、若年者の大人への移行過程に関する分析を報告しあった。

(8) 本研究プロジェクトの研究成果は、プロジェクトHPからダウンロード可能なディスカッションペーパー、学会報告、プレスリリースという形だけでなく、2008年から2014年まで毎年2月に「研究成果報告会」を東京大学福武ホールあるいは一条ホールで開催してきた。最終的な成果報告書としては、『現

代日本における若年層のライフコース変容と格差の連鎖・蓄積に関する総合的研究』(601頁)を2015年6月に刊行した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計40件)

Hiroshi Ishida. 2014. "The Lost Decade: Comprehensive Study on Chain and Accumulation of Disparities and Life Course Transformation of Young People in Contemporary Japan." *International Innovation* 166:62-64. 査読無 URL: <http://www.internationalinnovation.com/the-lost-decades/>

Hiroshi Ishida. 2013. "Inequality in Workplace Conditions and Health Outcomes." *Industrial Health* 51:501-513. 査読有 DOI: [doi.org/10.2486/indhealth.2013-0028](https://doi.org/10.2486/indhealth.2013-0028)

Hiroshi Ishida. 2013. "The Transition to Adulthood among Japanese Youths: Understanding Courtship in Japan." *Annals of the American Academy of Political and Social Science* 646:86-106. 査読有 DOI: [doi.org/10.1177/0002716212465589](https://doi.org/10.1177/0002716212465589)

有田伸. 2013. 「変化の向き・経路と非変化時の状態を区別したパネルデータ分析: 従事上の地位変化がもたらす所得変化を事例として」『理論と方法』28: 69-85. 査読有 DOI: [doi.org/10.11218/ojjams.28.69](https://doi.org/10.11218/ojjams.28.69)

三輪哲. 2013. 「パネルデータ分析の基礎と応用」『理論と方法』28: 355-366. 査読無 DOI: [doi.org/10.11218/ojjams.28.355](https://doi.org/10.11218/ojjams.28.355)

石田浩. 2013. 「若年・壮年層の格差の連鎖・蓄積のメカニズム 東大社研パネル調査(JLPS)の分析」『第88回日本社会学会大会』2015年9月19日、早稲田大学(東京都).

[学会発表](計82件)

石田浩「若年・壮年層の格差の連鎖・蓄積のメカニズム 東大社研パネル調査(JLPS)の分析」『第88回日本社会学会大会』2015年9月19日、早稲田大学(東京都).

Hiroshi Ishida, and Akira Motegi. "Educational Assortative Mating in Japan and the United States." *International Sociological Association, Research Committee 28 on Social Stratification, Spring Meeting, May 28th, 2015. Tilburg University (Tilburg, Netherlands).*

石田浩・藤原翔・有田伸・石田賢示・大島真夫「学校の職業的収益と教育機会 東大社研パネル調査(JLPS)とSSMデータの分析」『日本教育社会学会第66回大会』2014年9月13日、愛媛大学・松

山大学(愛媛県松山市).  
卯月由佳・元治恵子・佐藤香・長尾由希子・深堀聡子・藤原翔・元濱奈穂子「若者のライフコースと社会意識 高卒パネル調査(JLPS-H)による分析」『日本教育社会学会第66回大会』2014年9月13日, 愛媛大学・松山大学(愛媛県松山市).  
Sho Fujihara and Hiroshi Ishida. 2014. "Education as a Positional Good and Inequality of Educational Opportunity: Trends in Access to Education in Postwar Japan" International Sociological Association Research Committee on Social Stratification RC28 Conference. May 10, 2014. Central European University (Budapest, Hungary).  
Hiroshi Ishida. 2013. "Job Characteristics and Workplace Conditions and Health Outcomes: Social Inequality in Health in Japan," The 108th Annual Meeting of the American Sociological Association. August 10, 2013. New York Hilton (New York, USA).

〔図書〕(計 6 件)

大島真夫, 2012, 『大学就職部にできること』勁草書房, 224 頁.  
Hiroshi Ishida and David Slater eds. 2010. *Social Class in Contemporary Japan*. London: Routledge, 243pp.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/JLPS/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 浩(ISHIDA, Hiroshi)  
東京大学・社会科学研究所・教授  
研究者番号: 40272504

(2) 研究分担者

佐藤 香(SATO, Kaoru)  
東京大学・社会科学研究所・教授  
研究者番号: 10313355

有田 伸(ARITA, Shin)  
東京大学・社会科学研究所・教授  
研究者番号: 30345061

佐藤 博樹(SATO, Hiroki)  
中央大学・大学院戦略経営研究科・教授

研究者番号: 10175705  
(平成 26 年度より連携研究者)

(3) 連携研究者

玄田 有史(GENDA, Yuji)  
東京大学・社会科学研究所・教授  
研究者番号: 90245366

田辺 俊介(TANABE, Shunsuke)  
早稲田大学・文学学術院・准教授  
研究者番号: 30451876

村上 あかね(MURAKAMI, Akane)  
桃山学院大学・社会学部・准教授  
研究者番号: 20470106

白波瀬 佐和子(SHIRAHASE, Sawako)  
東京大学・人文社会系研究科・教授  
研究者番号: 00361303

三輪 哲(MIWA, Satoshi)  
東京大学・社会科学研究所・准教授  
研究者番号: 20401268

(4) 研究協力者

相澤真一(AIZAWA, Shinichi)  
朝井友紀子(ASAI, Yukiko)  
石田賢示(ISHIDA, Kenji)  
伊藤秀樹(ITO, Hideki)  
岩瀬晋(IWASE, Shin)  
大島真夫(OSHIMA, Masao)  
小川和孝(OGAWA, Katsunori)  
苅谷剛彦(KARIYA, Takehiko)  
菅万理(KAN, Mari)  
元治恵子(GENJI, Keiko)  
篠崎武久(SHINOZAKI, Takehisa)  
新藤麻里(SHINDO, Mari)  
菅原育子(SUGAWARA, Ikuko)  
鈴木富美子(SUZUKI, Fumiko)  
多喜弘文(TAKI, Hirofumi)  
戸ヶ里泰典(TOGARI, Yasunori)  
中澤渉(NAKAZAWA, Wataru)  
永井暁子(NAGAI, Akiko)  
長尾由希子(NAGAO, Yukiko)  
橋本摂子(HASHIMOTO, Setsuko)  
林雄亮(HAYASHI, Yusuke)  
平沢和司(HIRASAWA, Kazushi)  
深堀聡子(FUKAHORI, Satoko)  
福井康貴(FUKUI, Yasutaka)  
藤原翔(FUJIHARA, Sho)  
不破麻紀子(FUWA, Makiko)  
朴澤泰男(HOZAWA, Yasuo)  
前田幸男(MAEDA, Yukio)  
茂木暁(MOTEGI, Akira)  
山本耕資(YAMAMOTO, Koji)  
卯月由佳(UZUKI, Yuka)  
吉田崇(YOSHIDA, Takashi)  
脇田彩(WAKITA, Aya)